御卒業おめでとう

◇……本日3月10日、本校体育館において
◇……て南高校第1回の卒業式が挙行さ
◇……れることとなった。〝光陰矢の如
◇……し〟という言葉があるが、本校第
◇……1期生としてすべて〝無〟から出
◇……発した卒業生にとって、この短か
い3年間には実に様々な事があっ……◇
た。高校生活3年間のピリオドと……◇
もいうべき今日のこの日に際して……◇
488名の卒業生諸君の胸に迫って……◇
きたものは何だったろうか。……◇

きょう晴れの卒業式
——本校第一回——

今の三年生が、長い苦しい受験勉強に打ち克って、晴れの本校入学式に臨んだのは、昭和三十八年四月八日であった。あれから三年、今日三月十日、我々は彼等を本校第一回卒業生として送り出すことになった。

すべて何の行事を行なうのにも〝第一回〟の文字を冠せなければならなかった彼等である。本校の基礎は、彼等によって築かれ、高校としての体裁は、彼等によって整えられてきたのである。難関といわれた彼等にとってこれも力一杯輝かしい成果を挙げてきたのである。それにはすべて〝第一回〟の文字が付けられていたのだ。そして去年十月、三日の四日にわたって本校生の力を結集して文化展が開催された。これも無なる祭りさわぎなく、高校生としての理想を追求し、誇りあるものにしようという姿勢をもって行なわれたものであった。この文化展の成功は三年生のこの熱意があったからこそと言っても良いであろう。

ともかく、三年間はすぐ去った。三年生は母校を巣立って行く。

彼等の卒業後の動向を見てみると、就職希望者については三年生各自の努力と担任先生の御尽力によって早くから殆ど八～七ント就職決定という子はうれしいことである。

就職については、又友情や恋愛についても考えた。これは、高校生活三年間の縮たものと、とりわけ、のような時代で、高校時代を人間形成の主な重要な一時期として受けとっている。心に残る良い出会いとなられているのは、集団訓練、「ハイ、ハイ」すぐ目の前に第一の修学旅行が御殿場に青年の家。又、阿蘇での生活は、遠い外輪山の峰々、朝霧につつまれての朝のつどに、歌声をキャンドルサービス、瞬次口に見た自然の偉力、すべてが鮮やか印象となって残っていることだろう。自然の中で過ごしてみて、これら集団訓練のすばらしさは、南高生でなくとも味わえるものだった。

情熱を注ぎ込んで感動させた文化展、そして体育大会、マラソン大会も忘れられない。多くの人がいやな思い出としてあげている、テストや進学試験等、試験地獄の多い数数多々の事情で、歴と味わってきた。

懐かしの学舎　本校玄関前

就職一〇〇%決定

本校の就職希望者は、商業科、工業科、商業科合わせて二六人、昨年の十二月初旬には一〇〇%決定の線に達することができた。

昭和四十年度の労働市場状況は経済界の不況によって一般に大企業の求人は減少したが、一方この機会に良き人材を獲得しようとする中小企業からの求人の増加が目立った。本校に対する求人件数は約四五〇、他校に比べて多くと非常に多いと思われる。求人倍率を見ると、男子は全国平均一倍、男子は一倍を上回っている。

本校生の就職希望者は、一〇二一〇%減少しているようである。不景気の時は、公務員、幼稚園等への希望が多いというが、本校に於いてもその傾向が見られる。求人の出足は、第三次産業が最も早く、本校では求人行の昨年十月の試験を皮切りに主なものは八月で完了した。

企業側の考え方としては、男女共に適性業従事者を考える傾向がつよくなってきた。また業年度の就職試験も、本年度同様早期に実施が予想されるので、学校では第二学期内に、業種別説明会、個業家庭入り、職員、職業生徒

学校卒業する時によく使う言葉に「この春はまたたく間に過ぎさって……」というのがある。このまたたく間というのはもちろん彼等表現した言葉であるが、ほとんどの人に共通したものであるらしい。しかし個人において、それぞれ程度の違いを持っていることに違いない。一日一日が長くてやり切れない程であった人でも、今となってみれば短かったように思えるとか。がむしゃらに走り続けて時の経過にうっかりしていたが、いろいろあろうが、それらと一緒にすると高校三年の年月はたのように過ぎてしまったという。

この学校に入学し、今やまおめでとうの言葉を多くの諸君は多くの人々に囲んで言える何がある。三年間というのはもちろん彼等表現した言葉であるが、もっとそれから解放されて自分の思いがままに生活できるとなのか、学ぶことはすべて終了したというのか、社会生活に入るパスポートを取得したというのか。

卒業する皆さんへ

黒田校長

諸君が入学した頃は、校舎は一部しかなかったし、整備が遅れたち、半年過ぎて先生方の頑ばりはじめられ、球技場になるとのできない創設のはたらきが進んでいった。諸君の成長とともにこの学校の外観、内容が急速に整備展してきた。学校がこのままで来られるとしたのは、何といっても先生と生徒の心の一致である。

昨年度の一歩一歩地盤を固めの時代の建設精神である。関係を祝い、落成を祝う経験を通じ輝多くの人が待っているであろうか。このような機会は自らゆえたのではなくて、めぐまれたのから知れないが、そのチャンスを生かしたなければ、そのチャンスを生かしたは積極自身である。三年間の努力の成果は時られている諸君である。今、それを取り出すことは、できなくても、諸君の貯蓄能力を育てるエネルギーとして横たわっている。諸君の貯蓄能力は大きく、また次々に振起しようと望んでいる。若い人は「貯えることのできる人」と解したい。今は貯える時、求める時である。貯える力と最取する意欲とがアンバランスであってはならない。蓄積がその業を著してしまっている時は、枯木回然の姿をしているが、やがて新芽を天に向かって芽に爆発させるあのエネルギーはその間に貯えられているのである。私達の手から離れて力強く巣立って下さい。諸君は最善を尽くして生活を行なう。この校側はこれからも守り続けることを期待するので、はなければの言葉ともしたいと思う。

卒業する皆さんへ

▼三月に入り、さすがにからっ風の大将も去ったと見えて、寒さも和らぎ、コートを脱ぐ者も多くなってきた。もう春なのだ。木の芽もふくらみ、どこからか、風にのって花のやさしい匂いが漂ってくる。ニキビも出ろ！おでこに一つ、二つ。

▼春といえば、三年生もいよいよ卒業。おめでとう！

就職希望者は、勇力した甲斐あって百パーセント決定。

進学希望者は、すでに晴れて合格通知を手にしたものもあるが、まだ後ろで頑張っている受験生も少なくない様である。

かのヒルティは言った。

〝おとと価値ある生涯で、ちょうちょう荒れている澄んだ牧場の小川のように何の波瀾もなかったり、あるいは人工的につくった運河のように、始めから終りまで一直線の経過を辿るものはない〟今は、テスト・テストと勉強に追われていても、輝く明日のあることを、忘れないで頑張ってほしい。

▼去る二月十九日夜から、二十日にかけて降った大雪（約三センチ）は、我々に感激と、清く澄んだ心を与えてくれた。

この世に生まれて以来、雪ダルマを作った経験がないという人が殆んどの、遠州地方では、一夜のうちの一面の銀世界（？）に見とれ朝食を食べるのを忘れたり、雪ダルマ作りに専念していた人、「スッテン、コロリン」と、あの冷やかさが味わった人も少なくなかったようだ。

▼この雪で、市内の交通機関は相当乱れ、チェーン付の車も数多く見られた。本校のスクールバスも大分遅れた。そこで、これは幸い授業がさぼれるとばかり、のんびりバスを待つ者、待つのもはばかしいと豪胆（？）な者でもあろうかタクシーで学校へ急ぐ者と、さまざまであった。ある男生徒、「休校になるぞ。」と、うれしそう。ところが「本日の授業は平常通り。」との先生の連絡に「シュー！」

▼本校の生徒は礼儀正しく、立派な生徒に評判もよいようだが、一つ気になることがある。それは制服が多くないということである。この頃、Tシャツ上が潔たへアースタイルが多くなり、制服をかぶる嫌がる者になるというそして、一足歩くごとに、襟の乱れを気にして、トイレの鏡の前に直行する。いやはや、その細かな神経も現代っ子の特徴なのであろうか。

ともかく無難は、まちがっとる。まことに遺憾な風潮である。

▼「あら、貴女の顔にチョウチョが飛んでるわね。」と、先生に注意される女生徒も多くなってきたフールがだいぶ流行しているようだ。もっとうなると良ましなみうだ。おしゃれの一つだと思われる。身だしなみとは、清潔な服装高校生らしい髪型などである。流行を追ったりせず、高校生としての自覚をもって行動しよう!!未来の「レディーズ・アンド・ジェントルメン」をめざして！

遠州灘

論説

南高生の誇りをいつまでも

今日、三月十日は南高校第一回卒業式初めて他校と同じように卒業生を送り出すこととなった。〝春の光窓の雪……〟の思の流れる場内で、三年生は何を感じ、何を考えていただろうか。それは、あるいは一人一人異っていたかもしれない。しかし、誰の胸にも共通して浮んできたのは過ぎ去った三年間の生活の懐しい思い出であり、学窓を去る寂しさであったに違いない。そして今日、三月十日は生涯忘れることの出来ない日となることであろう。昭和三十八年四月八日三年生が第一期生として本校の正門に足を踏み入れた時から南高校の歴史は始まったのである新設校々々と言われながら渥山前校長先生の〝最善を尽くそう〟の校訓の下に、全員一体となって南高校建設のために頑張った三年間の思い出はいろいろ数えきれないほどあることだろう。すべてが懐しい思い出となっているに違いない。体育大会、カルタ大会、根性を出し切って走ったマラソン大会、市営プールを借りての水泳大会、又友人の寄贈に精一杯の拍手を送った弁論大会……と不完全な設備の中で、一つ一つ、一日一日、一週一週、一月一月と、一年一年と、新一年生を迎えて三学年が全部揃って高校としての外観が整い、又、渥山校長先生の後に黒田現校長先生を迎えたのである。そして今日の卒業式、平凡な感慨ながら月日の経つのは早いものだ、ということを痛切に感じるのである。卒業生にとって、この三年間の思い出はいろいろのにしようという姿勢をもって行なわれたものであった。この文化展の準備から開催までの期間を通じて我々の目にしたものは、最後の高校生活を充実したものにしようと忙しい中をクラス展、クラブ展準備に没頭している三年生の姿だった。この文化展の成功は三年生のこの熱意があったからこそと言っても良いであろう。

とこころで我々は、こうして母校を巣立って行く彼等に何を望んだら良いのだろうか。私達は、本高の誇りづくりに全力を注がれ、我々に校訓〝最善を尽くそう〟を残してくださった渥山前校長先生の転任である。完成年度を迎えたばかりの四年目月旬突然、先生は第二高校に転任された。此行を得る事情があったとはいえ、我々はあきらめ切れない気持で先生をお見送りしたのである。又、今日の卒業式を迎えることのできなかった一人の友——藤田文雄君の悲しい死を忘れることができない。

こうして過ぎ去った三年間、その感慨はそれぞれ異っているとも、我々は、その根本に於いてはある卒業生の〝すばらしい高校生活〟を得ることを持っていることができる。

〝とうとうない人にとっては、懐かしい思い出となっているかもしれない。

このような、我々の尽きない思い出の中にも、卒業生責が残し、悪い事かべなければならないことがある。それは、本校設定の準備期間を通して、貴重の努力のもとに中心的に働いてくださり、開校後は、本高の誇づくりに全力を注がれ、我々に校訓〝最善を尽くそう〟を残してくださった渥山前校長先生の転任である。完成年度を迎えたばかりの四年目月旬突然、先生は第二高校に転任された。此行を得る事情があったとはいえ、我々はあきらめ切れない気持で先生をお見送りしたのである。又、今日の卒業式を迎えることのできなかった一人の友——藤田文雄君の悲しい死を忘れることができない。

こうして過ぎ去った三年間、その感慨はそれぞれ異っているとも、我々は、その根本に於いてはある卒業生の〝すばらしい高校生活〟を得ることを持っていることができる。

会長に笹浪保君
初の女子立候補者も

十月十一日、四十一年度新期生徒会の選挙が行なわれた。告示と同時に笹浪保、米山誠二、高橋信博、鈴木みゆきの四名が立候補した。投票の結果、四九人票をもって笹浪君が当選し、次点は米山君の二二票。なお無効投票は一九二票であった。

今回の選挙で最も大きな注目がよせられたのは女子立候補者がでたことだった。今回は惜しくも落選してしまったが、女子の多い本校では女子はこれからの生徒会活動に大いに活躍してほしいものである。

四人の立候補者で、とかく批判の多かった今までの生徒会活動に新しい風を吹きこもうと今までにない白熱した選挙運動をくりひろげた。その代表的なのが会長になったにもかかわらず南高発展のためにと再立候補した大変の努力家だ。次点の米山君は南高一の情熱家といっても過言でない。その情熱で生徒と生徒会の緊密化を図ろうとした。これ程熱心なかたがたが高嶺、一見おとなしそうな彼だが、本当は大変の努力家でマジメな性格の持ち主である。初の女子候補者として注目をあび鈴木さんは、バレーできたえたファイトで生徒会と生徒を結びつけようとした。

以上会長に立候補した四名の顔ぶれをみるかぎりよい学園づくりは少数の人が必死に働いても全体が関心を示さなくてはなんにもならない。これからの南高発展のために生徒会員である我々は新役員に協力して行きたいものである。

新役員は次のとおりである。

会長　笹浪　保
副会長　岩井　淳子
会計　島野　潤美
書記　松島多字
　　鵜戸ひろみ
　　犬塚雅男

会長に聞く

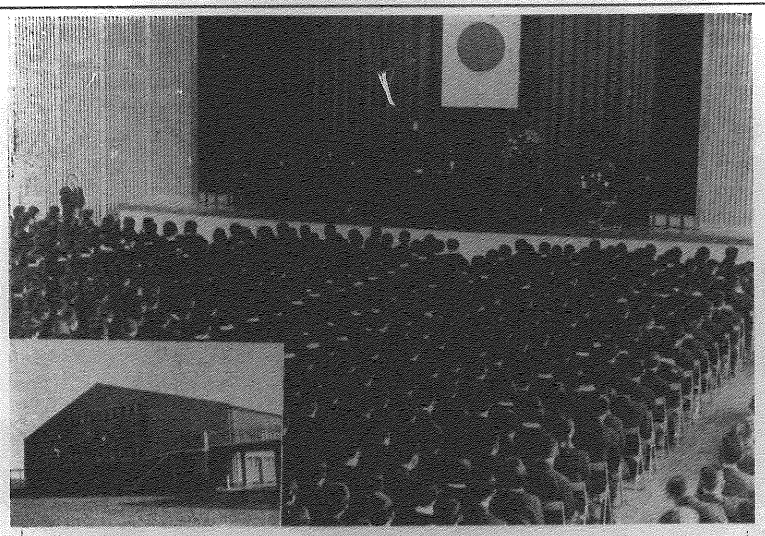
浜松南高等学校の誕生後一回卒業生を中心とし在校生諸君の努力によって作られました。

そして他校には見られないような女派な伝統が作られつつあります。しかしまだまだ未完成な状態であると思います。ですから卒業生、又在校生の御期待とともに私達生徒会本部役員一同、心しまして自分の仕事をしっかりしていくつもりです。しかし学校という大きな組織を動かすのに生徒会だけはけっしてできません。

そのためには生徒一人一人の協力があれば不可能に近い事でも可能にできるのではないでしょうか。そうする事によりさらに新しい生徒と先生達会員の溝もなくなる。

決定されたことは生徒会員の協力によって

体育完館成
全館落成式挙行さる


式場の模様

体育館全影

一月十八日、できあがったばかりの体育館で全館落成式が行なわれた。本校は高等学校急増対策の一環として、設立されたものである。昭和三十六年、浜松市に於いて高校誘致運動が活発となり、三十七年二月、現在地であるこの米津の一角に敷地が内定した。その後三月には県議会で正式に承認され同時に予算が決定された。そして湯山前校長先生をはじめ、準備委員や、数多くの方々の協力により昭和三十八年に北館が完成し、続いて南館が完成。そして、昨年の十一月には待望の体育館が完成した。こうしてまだ行なわれていなかった校舎の落成式をも兼ね、今度の全館落成式となったのである。この三年間、本校は新設校という名のもとにいろいろな面で困難のつかいを受け、何かせわしくて、我々は、その甘えた気持を、この全館落成式を機会にすてさればならないであろう。そして、先生徒ともに一致団結してよい伝統よい雰囲気づくりに若い力を、若い情熱を、精一杯発揮したいものである。

この日は、我々南高生を祝ってくれるかのように、寒さも和らぎ青空のたいへん美しい日であった。我々は、喜びを胸に秘め真剣に体育館に席を並べた。

県教育長をはじめ浜松市長、市議会議員、又、湯山前校長先生も、お祝いにかけつけて下さった。

広さを誇るこの体育館も、この日がはりは小さく感じられる程であった。うす暗さの堂、光り輝く床、広い館内は我々がまさに埋まってしまいたものである。

館内では堂の音一つせず、厳粛な雰囲気のうちに式は進められた。そして、来賓の方々から、南高校の新しいスタートにあたり激励や希望からの言葉が述べられた。式終了後、我々生徒には記念文鎮が渡された。体育館の完成によって、本校は設備はは誠に非常に優れた環境に於いて高校生活を送ることが出来ることになった。そして、我々にとっては、この南館落ちついたことより良いものとしてやはりかということが今後の課題になったのである。このすばらしい環境の中で我々は来賓の方々、世間一般の期待に答えるべく互いに協力していきたいものである。

式場での黒田校長の話は次の通りであった。

「教職員六十名、生徒千四百二十余名、今日のこの喜びを、みんなでわかちあい、いっそう職員にしたいと思います。落成式は単なる祝賀の集まりではなく、この機会に我々が団結して今日に至ったこの二年間を振りかえり、準備委員の方々をはじめ、工事担当者のみなさんの御勝力を十分謝いたしお礼を申したいと存じます。

校地九百八十坪万メートル、三階、四製鐵等の二つの校舎、それに加えて体育館が緑の田園に囲まれて、美しくたっております。我々は、この校舎に限りない愛情をもって守ります。愛することは、その価値を認めようとすることだと申します。校舎に愛情をもつとたいと存じます。

前校長湯山先生は"最善を尽くそう"という言葉を校訓として残してくださいました。最善をつくすからそこから深く、より輝くものだと思います。

今回は、南館一階の西の端で、連日、勇ましいかけ声をあげている柔道部を紹介しよう。部員三十人が、原田キャプテンのもとに、道場に掲げられた"努れば、必ず達"のことばをおのく、練習に明んでいる。練習内容は、準備体操、筋肉運動、柔軟体操、校舎の中を廻けて、ぐるぐる回って道場に入り、乱取りを行って、整理運動、正座し、礼をして六時頃終る。それでも、まだ物足りないような顔をして元気よく帰っていく。

有段者は、二・三人ぐらい、現在県西部における本場は、Bクラスといったところだが意欲旺んな後輩の追っている。この浜松南高校のひびいてゆく姿を是非見守っていただきたいと思います。」

柔道部

うなのだろう。現在のところ一人もいないのである。以前、一人の勇気のある女子の入部希望を断ったが聞くが、これは女子部員を認めないというのではなく、十人程度集まれば、歓迎しようということなのだそうだ。女生徒のみなさん、この辺で是非ふんどの力を発揮してみたら？

柔道で眼に浮べることといえば講道館の広さ、畳の広さ、四十九畳。若者たちの、真剣に青春をかけた勝負が、行われる場所はあるものの、彼等にとって、練習をより充実させる為に、せめて"自様ぐらい"と思うのも無理のない要望でしょう。とにかく、日本古来のスポーツという点で、柔道はもっと強い精神というものが、貫ぬいているようである。どんなスポーツにも共通していることであろうが、やはりスポーツには、こんな精神が通っているものなんでしょう。そして、彼等は、「柔道は勝つ為だけではない。しかし、やるからには、これから前に立ちはだかる大会の、一つ一つすべてに優勝を目標として努力する。」と、力強く語っていた。そして、そのことばの裏にひそむ若人の逞ましいエネルギーを信じて、今後の活躍をおおいに期待しよう。

書道クラブ

先日の県のコンクールをはじめ数々の大会で優秀な成績をおさめている書道クラブを訪問した。白井つね美先生のもとに女子五十二名、男子二名の在籍的に女子の多いクラブである。練習場は、三十七畳、ここでは「書道」というと、なぜか静かな、きびしい感じとは違って、みんな、なごやかに楽しそうである。一年生に入部の動機を、たずねると、「心に残る書きがほしい」。「前からやってみたかった」。等々。問と目標があって入ったのではないかと思わせるほどに、「いやー、たの書くことが好きだから」。とのことであった。練習は、週間に二度、毎日二時間まで練習する。コンクールの前になると、普通書は勿論でも練習して先生にみていただくのだ。お手本は統一されたものではなく個人個人で選んで練習する。先生はこれに対して、書くときの姿勢、筆の使い方、書道の心構えなどを教えられている。そうだ。

クラブ紹介

長さんの話と上級者のこと一緒の大会で成績をおさめ、三年の交流が少なく、なかなか集まって練習するだけで、幾分さびしいクラブにして行きたい。今後のことについては、クラブとしてコンクールに多く成績をとるように努力していきたい。又、自分自身で満足できる字を書きたい」。と、語ってくれた。先のコンクールで、優秀な成績をとった書道部きっと今後期待にこたえて、立派な成績をあげてくれるだろう。

次に、最近の練習の成果を記しておく。（　）内は学年。

【静大競書会】
特選　星野由恵（3）
根来美代子（3）
近藤鴨子（2）
小杉　満昭（1）
飯田満里子（3）
藤田谷子（3）

【静岡県高等学校書道展】
特選　鈴木あや子（2）
秀作　中村康子（1）
根来美代子（3）
西岡一樹（3）
服部さよ子（2）
藤田谷子（3）
佳作　丹羽水子（2）
大橋久美子（2）
入選　福井　豊子（3）

【県高校書初め展】
特選　大石初枝（1）
鈴木あや子（2）
根来美代子（3）
服部さよ子（2）
藤田谷子（3）
西岡一樹（3）

職員室だより

▼車の行列と大波の絶え間ない街路の一角に、赤い椿の花が咲いていた。もう春である。戸外のうららかな光の中で、風いきり歩きまわるのに絶好な季節になった。

▼職員室にも、早春そうそう、ぱっと花が咲いたような明るい雰囲気が漂っている。中でも宇治野先生。それもそのはず、高校時代からの熱烈な純恋愛が実って、この三月の終わりには、みごとゴールインの予定。他の先生方から毎日激励されたり、ひやかされたり。その道では一年先輩の谷口先生は、熱心に相談に乗っている。また、それまで相手固定した菊地先生は、純に冷ったられ、「もう、がまんができない」。と、下宿を変わってしまった。――宇治野先生の新生活に栄光あれ。

▼やさしい知恵袋として、皆に慕われている図書の大石さんも、ステキな彼氏を見つけ予定。見るもの聞くものすべてバラ色に変えるとか。本当に幸わせあれ。

▼他にも結婚されたり先生は多い。が、まだ触れるとシコシコ、カレそうなので、それは今、雪解でかきとって欲しい。

▼職員室よりのヒーロー、オレンジ先生と内藤先生のお話。先生の懐の広さ、とでも、言ったらいいのか、ある日一年生の女生徒、誘われ、ボールに汗を流していた。とこ、ろが、ハッスルしすぎボールをた、カ一杯蹴った瞬間、眼の前をいた、ま、ま、ま